



学校だより

バンクーバー補習授業校

2025年度

第6号

2025・5・28

学びを支える読書力

～親子で築く「ことばの土台」～

近年、子どもたちの生活は、スマートフォンやタブレットと過ごす時間が大きな割合を占めるようになってきました。特に、海外での生活では、英語によるコンテンツやSNS、動画などが身近な娯楽となっており、日本語に触れる機会はどうしても限られてしまいます。こうした環境だからこそ、今あらためて「読書」の大切さを見つめ直していただきたいと願っております。

読書は、ただストーリー展開を楽しむだけの活動ではありません。読書を通じて身につく「ことばの力」は、すべての学びの基礎となります。文章を正確に取り取り、自分の考えを整理し、相手に伝える——そうした力は、国語だけでなく、あらゆる学びの土台となる力です。

さらに、読書は集中力や想像力、共感力といった、人生を豊かにする力も育んでくれます。週に一度の補習授業だけでは補いきれない「ことばの定着」を、ご家庭での読書を通じて支えていただけたら幸いです。

ご家庭でも一日10分でも構いませんので、お子さんと一緒に本を開く時間を設けてみてください。親子で本を楽しむひとときが、かけがえのない学びの土壌となり、お子さまの未来を支える力へとつながります。スマートフォンの画面を閉じて、本のページをめくる——その小さな習慣の積み重ねが、子どもたちの学びと人生を大きく育てます。



写真は、小学部2年生教室での一斉読書の様子です。本校では、中学部でも朝の読書の時間を設けています。皆が静かに一斉読書した後は、その後の授業への集中力が格段に上がるものです。小さな積み重ねがやがては着実な成果を生むものと思います。

【日々の補習校生活から】 中学部3年生が幼稚部生に読み聞かせ



5月24日（土）の昼休み時間、中学部3年生の生徒たちが幼稚部の教室を訪れ、絵本の読み聞かせを行いました。

中学生たちは、自分たちで選んだ絵本を手に、優しく語りかけるように物語を読み進めました。ときに声のトーンを変えたり、表情を豊かにしたりと、幼児たちが想像の世界に入り込めるよう工夫しながらの読み聞かせ。その姿には、年長者としての思いやりと責任感が感じられました。

一方、幼稚部の子どもたちは、目を輝かせながら絵本のページをじっと見つめ、中学生の声に耳を傾けていました。絵本の世界に引き込まれていく様子はたいへん印象的で、このような異年齢交流の意義を改めて感じるひとときでした。

「蜻蛉つり 今日はどこまで行ったやら」 ～ 「武士道(新渡戸稲造)」の一節から 高等部国語 ～



高等部の国語の時間、ときおり校長がゲストティーチャーとなって、日本的なものの考え方や感じ方、そしてそれらが現れた言語文化等について、十数分間の短い講話を行っています。

この日の題材は、江戸時代の女性俳人 加賀千代女の俳句「蜻蛉つり今日どこまで行ったやら」でした。新渡戸稲造の『武士道』の一節をもとに、「日本人にとっての感情の表現とは何か」「言葉に託された想いをどのように読み解くか」について考えさせました。

生徒たちは真剣に話に耳を傾け、静かな時間のなかで日本語の奥深さにふれるひとときとなりました。日本語という言葉の背後にある文化的な背景や価値観に目を向けることで、ことばや文化について関心を深めてくれることを期待しています。